

『#大地の子』（山崎豊子著）を読んでみた。著者は『白い巨塔』、『華麗なる一族』、『不毛地帯』、『大地の子』など、人間の本質を世に問う長編小説を次々に手がける国民的作家。

本書は、中国残留孤児となった陸一心（ルー・イーシン）の苦難の半生を描いた物語である。1987年から1991年まで月刊文芸春秋に連載された。

敗戦で置き去りにされた子どもたちが、その幼い背に大日本帝国陸軍の罪業を一身に背負わされて「小日本鬼子」（シャオリベングイズ）といじめられ耐えてきた事実を描いている。冒頭から知識人を迫害する権利を毛沢東から保証された一般中国人のリンチは半端ではない。文革では紅衛兵がこのリンチに欣喜雀躍する。

時間を遡って主人公の敗戦後の悲惨な人生が描かれる、敗戦後ロシア人に襲われ、両親を殺され、幼い妹と生き別れになる。中国人男性に奴隷のように酷使され、別の中国人に売られる（満州占領下で大日本帝国陸軍が行った傍若無人な行動に対する仕返し）。やっと人間味溢れる養父に巡り合い大学を卒業するが、文革で「小日本鬼子」という理由で、迫害され、罪なき理由で労働改造所送りとなる。よくもこんなことを考え着くと思うくらい、過酷な運命が待ち受けている（著者が3年間かけて数千人の人々から得られた情報を元にしていく）。

一方、満蒙開拓団から陸軍に徴兵され別の戦地に居た父親は難をのがれるが、実父、妻、息子と娘の消息が不明となる（死んだものと考えざるをえなかった）。ところが、息子である主人公は素晴らしい養父に出会い中国人並みに学歴を得るが、逆に生き別れたその妹は愚鈍で貪欲な養父に引き取られ悲惨な人生を送る。

時間がどんなに流れても、主人公が中国で生きてゆくのに、ずーとこの「小日本鬼子」という負のレッテルが貼られて、過酷な人生を生きてゆくことになる。結婚も就職も共産党入党もネガティブな目が周囲から注がれる。救いは、妻となる女性と幼馴染の親友が影に日向に援助してくれることであつた。

後半は、中国と日本とで協力して巨大製鉄所の建設に奇しくも主人公と父親が関わり、仕事が進捗してゆく。そこでも相も変わらず「小日本鬼子」というレッテルが主人公を不幸へ誘う（産業スパイの疑い）。ここには中国共産党内の権力争いが暗い影を落とす。著者はよくもここまで悲惨な運命を思いつくもの

だと驚嘆してしまう（連載企画なので緊張する場面を切らさぬ必要があったのかもしれない）。

最後、親子水入らずの三峡下りの船の中で父親に日本に帰ることを誘われて、主人公の心は揺れる。主人公の決断は果たして・・・。

よくもこのような内容の本が書けたと思うのだが、それは著者がこの作品に取り掛かっていた時期に中国の時の権力者に趙紫陽が就いていて、自由に書くことを保証したからだそう（この直ぐあと趙紫陽は失脚している）。大日本帝国陸軍が犯した侵略行為に対する中国人の怨念を浴びながら、一人の残留孤児を目が覚めるような良質の人間としての人生を描き切っている。

本書は著者の戦争3部作の一つであるが、日本の負の歴史に問いかけながら、読者を飽きさせない物語が展開されてゆく。『不毛地帯』は読破したので、次は『二つの祖国』に挑戦しよう。